

節音調の担う意味についての機能的考察

角 岡 賢 一

▶キーワード

選択体系機能言語学
言語類型論
音調体系
段落音調
メタ機能

▼要 旨

この小論では、ハリデー教授の提唱する選択体系機能言語学の枠組みに沿って、言語の機能に着目した類型論的分類を追求する。世界の諸言語は、音声・音韻・形態・統語などの諸側面から多様な類型に分類されてきた。これら多様な観点のうち、例えば母音・子音という音素や主語（という範疇があるという前提に立った場合）・動詞・目的語／補語という語順などは外形的基準から類型化が比較的容易である。そのためにこれら外形的基準による類型的研究は多かったが、意味や機能に立脚するものは相対的に少なかったと言える。

この小論では研究対象を限定するために、音調体系を扱う。まずは全言語を声調言語であるか否かで类型的に二分し、その後に節音調の機能によって非・声調言語を更に二分割する。

この小論の目的は、上述のような意味的・機能的観点で諸言語を類型化する理論的妥当性を検証することである。このことによって、現行の選択体系機能言語学が前提としているメタ機能などの道具立てが意味分析に有効であることを裏付けることも副次的目的とする。

1. はじめに

この小論の目的は、言語の意味・機能という側面を類型化する枠組みを提示することである。特に節音調（イントネーション）の意味に着目し、節音調がどのような機能を担っているかについて機能言語学の観点から類型化する。本節では機能言語学と言語類型論という手法について、それぞれがどのような視点に立ってきたかを概括する。これは第2節以下で具体的な検証に入る前提とするためである。

「機能言語学」とは字義通り、言語の機能に着目して言語分析を行うものであるが、機能と称するだけでは研究手法が甚だ漠然としている。ハリデー教授の提唱する選択体系機能言語学（Halliday 1985, 1994, 2004）では、「意味」を主要な対象として、言語だけに留まらず社会構造全般にまで視野を広げて重層的に分析を行うのが最大の特徴である。「意味」あるいは「機能」を分析する道具立てとして、観念構成・対人的・テキスト形成という三つのメタ機能や、これらメタ機能に対応する状況のコンテキスト構成三要素——活動領域・役割関係・伝達様式という階層が設定されている。

他方で言語類型論は、主語（という範疇が存在するという前提に立つ場合）・動詞（あるいは日本語のように「述部」として括った方が実態に適合する言語もある）・目的語・補語という語順について、あるいは動詞と助動詞の活用に関して屈折・分析・膠着・孤立という分類を立てた手法が古典的と言えるであろう（例えば、語順に関する類型論では角田（1991）が世界の130言語を対照している）。

以下、第2節では声調言語の区別について概観し、声調言語でないものを語用的意味の観点から更に二分割する。第3節で段落音調が日本語と中国語においてどのように機能するか、実例を用いて検証する。第4節では段落音調の機能を詳細に分析する。

2. 音調体系の類型

発話において、語または文単位での抑揚を意味の差として具現させるのは普遍的な事実と考えられる。しかしながら特に節という単位において、意味がどのように具現されるかは言語間の差が大きい。言語間のこの差について、分類の客観的かつ具体的な基準を設けることが本節における狙いの一つである。

語彙面で音の高低が弁別素性となる言語において、音調言語と高低アクセント言語の場合を区別すべきである。表面的にこの二者は、語彙の抑揚で意味を区別するために似通っているような印象を受ける。一般に声調言語の代表例として引かれることの多い北京語(1)と、高低アクセント言語からは日本語（東京方言(2)）を例に検証してみよう。

まず現代北京語において /u/ という音を持つ4通りの一音節語と、 /ya/ 音を第一字に持つ二音節語の声調組み合わせを示す。漢字表記は日本語の字体を採用する。「轻声」については後段で説明する。

- | | | | | |
|-----|------|-----|-----------|-----------|
| (1) | 一音節語 | /u/ | 一声（高）：「廬」 | 二声（昇）：「炉」 |
| | | | 三声（低）：「虜」 | 四声（降）：「鹿」 |

二音節語

1\2	1	2	3	4	轻声
1	圧縮 yāsuō	圧延 yāyán	压倒 yādǎo	压力 yālì	压了 yāle
2	牙根 yágēn	牙輪 yálún	牙粉 yáfěn	牙色 yásè	牙口 yákǒu
3	雅觀 yǎguān	雅人 yǎrén	啞語 yǎyǔ ¹	雅意 yǎyì	雅致 yǎzhi
4	亜軍 yàjūn	亜麻 yàmá	亜鉄 yàtiě	亜似 yàsì	軋了 yàle

現代北京語では、第一声から第四声までの「四声」を弁別する。これら固有の音調として四種類の他に、「轻声」という特殊な範疇が発達しているのが北京語の特徴である。轻声として実現されるのは、助辞などの文法機能的語彙範疇や複合語の二字目以後に多い。現代北京語における轻声字は、本来一字で固有音調を有していたのが、助辞や複合語の二字目以降などという補助的な位置のために固有声調を失い、付属的ピッチに変化していったものである。轻声字の音価は、直前の固有声調によって決定される。即ち直前が第一声・第二声音節であれば、後続の軽声音節は比較的高く実現され、直前が第三・第四であれば相対的に低くなる。

(1)で概観したように北京語は四種類の固有声調を持つ故、一音節語では4通り、二音節語では第二字が轻声となる場合を含んで20通りの音調組み合わせの可能性が生じる。但し音調同化の一般規則（第三+第三→第二+第三）を考慮に入れば、音声的には19通りとなる。三音節以上となると、轻声が生じる位置によって理論的には音調組み合わせの数は飛躍的に増大するが、単純化するとn音節の語彙においては（4のn乗）通りが考えられる（轻声を除外しての計算）。

次に日本語アクセント型の記述である。日本語アクセント型の分類は、『新明解国語辞典』（第五版）に準拠した。

- | | | | |
|---------|-------------|---------------|---------------|
| (2) 日本語 | 一音節語 /ha/ | 0 型 (低):「葉」 | 1 型 (高):「菌」 |
| | 二音節語 /hasi/ | 0 型 (低-高):「端」 | 1 型 (高-低):「箸」 |
| | | 2 型 (低-高):「橋」 | |

日本語二音節語においてアクセント型の0型と2型は、単独では「低-高」で区別が付かないような外観を呈している。しかし格助詞「が」が後続する際、0型の「端が」では「低-高-高」と助詞「が」が高くなるのに対して、2型の「橋が」では「低-高-低」と助詞が低くなる。このように日本語の二音節語では、三通りのアクセント型が区別される。これを一般化すれば、日本語においてn音節の語には（n+1）通りのアクセント型が観察される。

声調言語と非・声調言語はこのように、客観的・外形的な基準によってなされる。

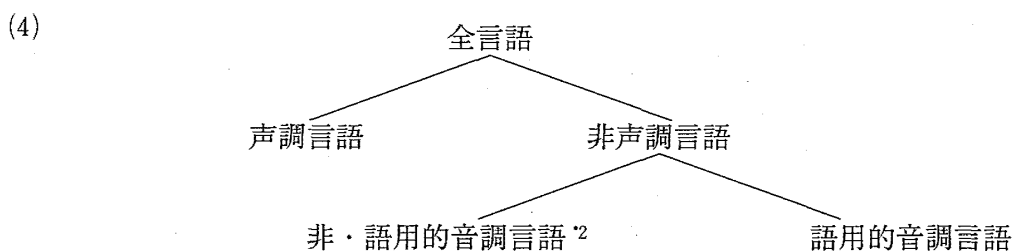
音調言語と高低アクセント言語の差は、このような側面に留まらない。声調言語は専ら語彙の弁別に音の高低を充てるため、節音調が制約を受けると考えられる。北京語と同様、漢語の有力方言で声調言語である広東語における節音調についてMatthews and Yip (1994: 27) は次

のように述べている。

- (3) As Cantonese is a tonal language where pitch is used to differentiate words, intonation at the level of the sentence is restricted, at least by comparison with English.

これは「声調言語においては、節音調は全く機能しない」という極論であるように考えられる。文単位での音高低は、語彙によって決定されるために制約を受けるのは確実であるが、段落音調（後述）のように段落単位に及ぶ比較的長い範囲ではこの制約を免れる余地がある。

以上の結果を総合すると、声調言語と非声調言語という区分に加えて非声調言語を更に細区分して次のような三分割が想定されている（Kadooka 2000, 2001a）。



Kadooka (2000, 2001a) においては、非声調言語を統語的音調言語（Syntactic Intonation Systems: SIS）、語用的音調言語（Pragmatic Intonation Systems: PIS）と区分した。ここでは統語的音調言語を「非・語用的音調言語」と呼称を変更する。その理由は、「音調の統語的意味合い」という定義が曖昧であること、節音調の担う機能を語用的であるか否かを基準とした方が分類の単純化を図れることの2点である。

自然言語に普遍的な音調の傾向として、下降音調は話者の情報提示、上昇音調は話者の判断中立もしくは聴者に対する情報提供の要求という側面を挙げることができる。これは非声調言語については一定程度確立された一般則であると考えられる。しかし声調言語に関しては、語彙面でピッチが制限されるため、節音調にこのような側面を持ち込むことが相対的に困難である。上述(3)のような断定は、この音声・音韻の前提に端を発しているものであろう。

次に非声調言語での節音調の機能に着目する。選択体系機能文法における節音調の機能は、英語を主たる対象として構築されてきた枠組みであった（Halliday 1967, 1970, 1985, 1994, 2004）。これら先行研究においては、英語文例が節音調によって種々の語用的意味合い——例えば、話者の強い疑念、皮肉、無関心、断定——を雄弁に示唆する実例が挙げられていた。さらにこのような語用的意味合いは少数特定の発話例のみならず、広範な場面においても普遍的に盛り込めることが示唆されていた。

このような節音調の機能的豊かさは、日本語のような言語では観察されなかった。しかしながら、文末音調の下降と上昇によって平叙文と疑問文の区別はなされるという機能において「統語的音調言語」という位置づけをしたのであった（Kadooka 2000, 2001a）。次節においては段落音調における節音調の機能という観点から、(4)のような3区分について新たな知見を加えたい。

(4)における三分類の代表的言語と、各範疇における言語的特徴を例示すると次のようになる。声調言語についての記述はKadooka (2002, 2004b) に基づき、Kadooka (2004b) で例として挙げたハウサ語以下の4言語を含めている。また語用的音調言語と非・語用的音調言語については、Hirst and Di Cristo (1998) の記述に基づいてKadooka (2001a) で分類を試みた。個別言語に関してはそれらを参照されたい。

(5)

	声調言語	非・語用的音調言語	語用的音調言語
代表例	中国語（北京語、広東語）、タイ語、ベトナム語、ハウサ語、キナンデ語、ルガンダ語、マザファ語	日本語、スペイン語、イタリア語、ルーマニア語、フィンランド語、マジャール語、アラビア語	英語、ドイツ語、オランダ語、スウェーデン語、ポルトガル語（欧州、ブラジル）、フランス語、ロシア語、ブルガリア語、ギリシア語
高低ピッチの作用域	語彙	語彙／節	節
語末の意味付加	終助詞	終助詞	付加疑問

「高低ピッチの使用域」について説明を加えておこう。声調言語は定義上、各語彙項目を高低ピッチによって区別する。このことによって、節音調の担う対人的、テキスト形成的機能は、(3)で述べられているように制限を受ける。非・語用的音調言語は、日本語のように語彙アクセントにおいて高低ピッチを採用すると同時に、節音調でも上昇／下降調など、意味区分においても一定程度の役割を果たしている。語用的音調言語では、語彙アクセントは専ら強弱によって弁別し、節音調が語用的ニュアンスを担う。

(4)における第一分岐、すなわち声調言語であるかそうでないかの弁別は絶対的である。しかし非・声調言語における分岐は相対的である。つまり、語彙が高低アクセントによって弁別される言語であっても、節音調が対人的・テキスト形成的機能に富むという例は理論的に可能だからである。^{*3}この点については詳細は、今後の研究に委ねる。

「節末の意味付加」についても説明しておく。便宜上「節末」と表現しているが、日本語の終助詞・中国語の語気助詞は狭い意味での節末だけではなく、文節の切れ目に置くことができる。一つの節に複数の助詞を置くことも可能である。対して英語の付加疑問は、統語的な節という単位でしか置くことはできない。これら三言語に共通するのは、これら助詞や付加疑問によって、聞き手に対して情報提供を求めたり、話者の主観を織り込んだりというような機能を担う側面である。この機能は、話し相手に対する働きかけという意味で対人的であり、前後の節を連携して一続きの文脈をなすという意味でテキスト形成的メタ機能に関連していると考えられる。これら節末の意味付加は、日本語や中国語において対人的意味合いを示唆するために節音調の代替手段として多用されるという面に着目することも重要である。

ではここで非・声調言語のうち、語用的音調体系を持つ言語とそうでない言語の区分について見ておこう。語用的音調体系を持つ例として、欧州ポルトガル語の記述をCruz-Ferreira (1998: 171–173) から引用する。大文字は、強勢の置かれる音節を示している。

- (6) a. está a choVER outra VEZ (a high-falling tone)
 'it is raining again (and I cannot stand it)'
 b. porque É que não Dizes o que PENsas? (a high-falling tone)
 'why don't you speak your mind? (you are an idiot if you don't)'
 c. SAI daQUI!! (a high-falling tone)
 'get out of here!! (I won't tell you again)'
 d. onde É que puSESte o meu caSAco?! (a high-falling tone)
 'where have you put my coat? (I'm sick and tired of you misplacing it!)'
 e. eu viVI na CHIna dez Anos (a rise-fall)
 'I lived in China for ten years (but I never learned the language)'
 f. tu SAbes quem É aquele TIpo? (a rise-fall)
 'do you know who that chap is? (he's the one who was jailed for bigamy)'

英訳のうち括弧内に記されているのが、話者が言外に示唆している語用論的意味合いである。(a)では「雨が降っている」という客観的叙述の中に話者の雨を厭う心情が、落差の大きい下降調によって増幅されている。(b)は「なぜ気持ちを話さないのか」という発話自体、相手を責める意図が織り込まれていると見るべきであろうが、同じく落差の大きい下降調が「話すべきだ」という強い話者の感情に拍車を掛けている。(e)は上昇－下降調という音調で実現されるが、「中国で十年暮らした(が、言葉は身に付かなかった)」という括弧内の示唆は観念構成的な領域に踏み込む情報である。同じく上昇－下降調である(f)も、話者の知っている情報が予想外である、という意味合いを含有していると解するべきであろう。音調だけで「重婚で投獄された男」という情報までは盛り込めないが、音調を含めた話しぶりによって「こんな常識外れの事態だ」という驚きを先取りしたという側面が示されている。

このように有標である音調パターンが帯びる意味合いは、語用的音調体系の言語においては顕著である。いま一つの特徴は語用的音調体系言語では、ほぼ全ての発話において、自由に(6)のような表現が可能、という点である。非・語用的音調体系言語である日本語でも、ある限定された発話では節音調による種々の意味表出が観察されている (Kadooka 2004b, p. 393)。しかしこれは「そうですか」という相槌における音調型の変異に限られ、この例をもって「日本語において語用的節音調が普遍的である」とは言えない。

他方で非・語用的音調体系言語においても、下降調－断定・上昇調－疑問という無標の組み合わせによる節音調の機能は広く認められる。

3. 段落音調

この節では、段落音調について検証を加える。上掲第2節(3)のように、声調言語では節音調の機能に制限が加えられるという考えが成り立つであろうが、段落音調についてそのような制限が加わるか否か検証する。

段落音調とはパラトーン (paratone) の仮訳であり、英語における節音調研究の中で「発見」されたという経緯がある (Tench 1996, Wennerstrom 2001)。段落音調の定義や実例はこれら

文献を参照されたい。ここでは、この定義に沿った日本語の実例と、日本語例を中国語に翻訳した場合を考察する。

次の例は、国会での予算委員会審議における質疑応答である^{*4}。2002年2月12日、衆議院予算委員会において麻生太郎委員が遠山敦子・文部科学大臣（当時）に質問を向ける前後の行である。音調表記は、日本語表記する点を除いてWennerstrom (2001) に従う。

(7) 行

- 1 この点について→
- 2 重ねて→
- 3 ご努力、ご尽力を↗
- 4 お願いいたします。↓ (1.0)
- 5 ↑そこで次に↘
- 6 教育について↘
- 7 遠山大臣に→
- 8伺いたいと思います。↓

凡例 →：平坦調 ↗：低上昇調 ↓：下降調 ↘：低下降調 ↑：高・段落音調
(1.0)：1.0秒の断絶

「高・段落音調」(high paratone) とは、話題転換の折りに旧話題の終端にかけては話者が調子を落とし、新話題を一際高い調子で切り出す現象を指す現象を指す。この例においては、第1～第4行が旧話題であり、低い音調に押さえられている。第5行で話題を転換すると共に質問相手を替えている。そこで第5行の冒頭に高・段落音調を無意識に用いて、話題の転換を聞き手に訴えようとしている。

次に低・段落音調の例である。低・段落音調とは、本来の話題から一時的に逸脱することを示唆する目印である。(7)と同じく2002年2月12日衆議院予算委員会での審議、当時の自由党議員であった西川太一郎委員の質問である。

(8) 行

- 1 そういう実態が→
- 2 ↓私は与党ですよ↗
- 3 私は野党みたいに勘違いされると困るけど↘
- 4 与党だ (0.2) ↘
- 5 ↑与党でもですね (0.1) →
- 6 これは (0.1) →
- 7 私はですね、やっぱり (0.1) ↘
- 8 しっかりやっていただかなくては困ると思うんです。↘

凡例 ↓：低・段落音調

1行目の「そういう実態が」は、節全体の主語となるべく切り出されたのであるが、すぐさ

ま2行目で本来の話題から逸脱を開始する。西川議員は当時、連立与党を組んでいた自由党所属であった（自由党は後に自由民主党に合流した）が、所属議員が少数であって知名度が低いことを自覚していたためか、自由党が与党であることを強調するという挙に出た。2行目から5行目にかけて「野党ではない」と繰り返している。5行目から7行目にかけては、口語独特の冗長さが端的に観察される。5行目の冒頭では高・段落音調も観察される。これは(7)における話題の転換とは多少異なり、「自分は連立与党の一員であるけれども」と念押しするような効果を狙っている。6行目の「これは」は1行目の主語を想起させる機能を兼ねているが、最終的に8行目で受けられる。全体としてこの8行は「そういう実態はしっかり対処してもらわなくては困る」と一言で片付けられるが、「自分が野党議員だと勘違いされると困る」という脱線を挟んで、本筋から逸脱した冗語が多い。低・段落音調はこのように、一続きの節に途中で脱線した話題を挟み込むに際して有効な目印として機能する。

次に中国語において、同様の段落音調が見られるか否か検証するために、日本語例(7)と(8)を翻訳するという間接的手法を採る（拙訳による）。英語と日本語においては音調群が区切りとなるが（Halliday 2004：14-17）、北京語にはそれに対応するような音調単位がないため、日本語と対応させる改行を行う。

(9) 行	拼音	漢字（日本語字体）
1	Guānyú zhège wèntí	關於這箇問題
2	háí yìdiǎr	還一點
3	qǐng nǚlì, jìnli, zhǐdǎo.	請努力、尽力、指導。
4	Ránhòu	然後
5	guānyú jiàoyù	關於教育
6	xiàng Yuǎnshān bùzhǎng	向遠山部長
7	qǐngwèn (yíxià)	請問（一下）。

直訳調で中国語としてはやや不自然かもしれないが、日本語との整合性を求めて(7)と(9)の各行が対応するように努めた。しかしながら日本語の「お願いします」が中国語では「請」の一字になって目的語に前置されるなど、統語上の違いから厳格な一行対一行の対応とはなっていない。

上例(9)では、4行目に話題の転換が図られているのでここに高・段落音調が挿入されたとしても違和感はないと思われる。旧話題の終末にかけて、全体的に調子を落として新話題への転換が間近であることを示唆するというのは、音調言語であっても可能であろう。新話題に切り替わると同時に声を張り上げ、一段と高い調子で清新な印象を与えようとするのが高・段落音調の特徴である。段落音調は節を超えた広い範囲で生じる現象であるから、声調言語のように語彙単位で利用されるピッチを超える余地がある。

次に、低・段落音調について日本語例(8)の翻訳を試みる。

(10) 行	拼音	漢字（日本語字体）
1	Nàyáng shíjī...	那樣實際...

2	wǒ shì yǔdǎng...	我是与党
3	yàoshi mǒurén cuòwù wǒ shì yědǎng de huà,	要是某人錯誤我是野党的話、
4	wǒ kùnhuò	我困惑
5	wǒ shì yǔdǎng	我是与党
6	kěshì, zhège,	可是、這箇、
7	wǒ xiǎng	我想
8	yīngāi héshìde chǔlǐle.	應該合適地处理了。

前提として、日本語での例と同様に2行目から話題の逸脱が起こるものとして忠実に行毎の逐語訳を心懸けている。第1行で「このような実態が」と話題を切り出すものの、すぐさま自分が与党であることに話題が逸脱するという事態は、北京語においても極めて自然な流れと考え得る。そうすると北京語においても、日本語と同様に低・段落音調によって話題の逸脱を示唆するのが自然であると想定することができる。

結論として中国語においても段落音調の機能は、非・声調言語と同様に認められる。今回は日本語例からの翻訳によって、北京語に段落音調が機能するか否かという検証方法を採用したが、直接に当該言語から該当例を採取する手法が望ましいであろう。声調言語における節音調は、このような観点からも研究されるべきである。

本節で検証した限りにおいて、段落音調は(4)に掲げた三区分に等しく分布するようである。これは特に北京語のような声調言語においては、節音調が制限されるというように主張されてきた(3)のような類型論と一線を画す。

4. 段落音調のメタ機能分析

前節で段落音調の実例を挙げたが、この節では段落音調についてメタ機能という観点から分析を施す。三メタ機能のうち、観念構成はさらに論理と経験に下位分類する。

節音調そのものが、観念構成的メタ機能を帯びるという分析は想定しにくい。観念構成メタ機能を論理と経験に下位区分しても、それは同様であろう。段落音調について言えば、仮に日本語例(7)、(8)においてそれぞれ高・低の段落音調が盛り込まれなかったとしても、実世界に変化はない。

しかし対人的メタ機能においては、段落音調は大きな作用をなしていると分析すべきである。聞き手が存在してこそ、話し手が意識をして音調に変化をもたらすという点で対人的メタ機能に関する要素は大きい。段落音調とは「話し手が聞き手に送る信号」という比喻も成立するであろう。Kadooka (2006: 56) の表 (22) には、対人的メタ機能の欄に段落音調が含まれていないが、このような観点からは段落音調の対人機能機能を評価すべきであろう。

テキスト形成的メタ機能についても、段落音調は大きく関与していると分析すべきである。高・低いずれの段落音調も、複数の話題を扱うという点で共通している。高・段落音調は旧話題から新話題への転換を明示し、低・段落音調は主話題からの逸脱を示す。このように発話が複数の話題に関わる場合において、「段落音調が話題間の切り分けを示す」という観察が成立する。このような意味で段落音調は、非常に高度なテキスト形成機能を有している。

節音調全体について、メタ機能別の総括を次のように行っている（Kadooka 2003：12、原表記は英語による）。

(11)

	Ideational	Interpersonal	Textual
English	Valid	Valid	Valid
Japanese	Valid	limited	limited
Chinese	Limited	more limited	limited

Kadooka (2003) には中国語のテキスト形成メタ機能に関連して、註で「段落音調について、英語や日本語と同様の機能を有しているという前提で、限定的ながらも中国語のテキスト形成メタ機能は認められる」と記されている。本論第3節で、北京語の段落音調は間接的に確認されたと考えている。

次に段落音調が有する機能の、言語間格差について考察する。高・低2種類の段落音調は、この小論で対象とした言語いずれにおいても確認された。高・段落音調は話題の転換、低・段落音調は主話題からの逸脱をそれぞれ示唆するという機能も3言語に共通であった。段落音調と同じように、テキスト形成面で機能すると考えられる英語の音調一致（Halliday 1994, Chapter 8, section 10）は、日本語や中国語には観察されないのに比べると、段落音調は普遍的な現象であると言える。

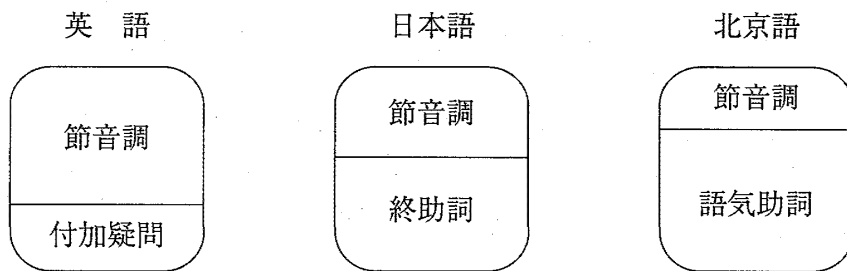
5. 結び

以上のようにこの小論では、節音調の果たす機能について選択体系機能言語学の観点から考察を加えてきた。この節では議論の纏めをしておきたい。

段落音調以外では、声調言語・語用的音調言語・非語用的音調言語という類型別で、節音調の果たす機能に大きな差が見られた。しかし段落音調に関してはこのような言語間格差がほとんど見られず、節音調の機能について類型論的に対照して非常に興味深かった。理由として考えられるのは、段落音調は節を超えた長い範囲で作用する現象であるために、語彙レベルでの高低ピッチに制限されにくい、という事情が挙げられよう。

ここで一つの仮定を立てる。各個別言語において、Kadooka (2001b) で定義したような対人的ニュアンスが一定量存在すると仮定し、それがどのように具現されるかを図示してみる。本論で検証した英語・北京語・日本語の3言語を対象とする。例示した範疇——節音調、英語の付加疑問、日本語の終助詞、北京語の語気助詞——はこれが当該言語を網羅的に示したのではなく、この小論で多少なりとも言及した、という基準でのみ対象としている。図の面積は、実際の用例などに比例した定量分析ではないことを断っておく。

(12)



今後の課題としては、対人的意味合いを具現する手段を更に精緻化して研究することが挙げられよう。例えば高・段落音調において、話題を転換する際には音調とともに、発話区切りにおける間合いの取り方、声量などが相互作用している。これらは全て無意識のうちに話者によって制御されている。機能という面に徹底するならば、広い視点から分析を施す必要が生じるであろう。

註

- *1 第三声が連続する場合、一般的に最後の第三声字を除いて第二声に変化する。(音調同化)

馬口鉄 (ブリキ) /mǎkǒutiě/ → [mǎkǒutiě]

第三声は、他の三音調に比べてこの点で有標であると言える。第三声が第二声に変化すると類似の声調変化は、同一字音反復が第1声として実現される次の例にも観察される。

好好兒 (ちゃんとしている) /hǎohǎor/ → [hǎohǎor/]

このように北京語における声調同化は第三声で観察される場合が多い。第三声以外では、第四声における次のような例が挙げられている (尚 (1992: v))。

慢慢 (ゆっくりと) /mànmàn/ → [mànmàn]

これは第三声の反復「好好兒」の場合と同じく、同一字反復による特殊例と考えるべきであろう。

- *2 この「非・語用的音調言語」は、Kadooka (2006) における “syntactic intonation languages” を指している。この用語変更は、声調・音調の統一的把握のために非・声調言語を二分割する基準として、英語のように語用的音調が有用であるか否かを採用している。
- *3 スウェーデン語は、強勢と高低アクセントが併存する体系と考えられている (『言語学大事典』第2巻、「スウェーデン語」の項目)。この2種類のうち、高低アクセントは日本語と近い体系であるが、同時に英語と同様の強勢アクセントも見られる。Gårding (1998: 121) は、スウェーデン語の節音調について次のように述べている。
- ... there are contributions also from lexicon and syntax [in speech acts conveying the speaker's attitude, emotion and selected center of message: KK]. However, the modal and expressive signals of intonation are so strong that they may override other cues.
- *4 これら例はKadooka (2004b) からの再録であるが、ローマ字表記から日本語表記へと改編している。

参考文献

- Cruz-Ferreira, Madalena. (1998) “European Portuguese.” in Hirst and Di Cristo (eds.) pp. 167 - 178.
Daneš, František. (ed.) (1974) *Papers on Functional Sentence Perspective*. Den Haag: Mouton.
Gårding, Eva. (1998) “Swedish.” in Hirst and Di Cristo (eds.) pp. 112 - 130.
Halliday, M.A.K. (1967) *Intonation and Grammar in British English*. The Hague: Mouton.
Halliday, M.A.K. (1970) *A Course in Spoken English: Intonation*. London: Oxford University Press.

- Halliday, M.A.K. (1973) *Explorations in the Functions of Language*. London: Edward Arnold.
- Halliday, M.A.K. (1974) "The Place of 'Functional Sentence Perspective' in the System of Linguistic Description." in Daneš (ed.).
- Halliday, M.A.K. (1979) "Modes of Meaning and Modes of Expressions." reprinted in Halliday (2002).
- Halliday, M.A.K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar*. (first edition) London: Edward Arnold.
- Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*. (second edition) London: Edward Arnold.
- Halliday, M.A.K. (2002) *On Grammar*. London: Continuum.
- Halliday, M.A.K. (2004) *An Introduction to Functional Grammar*. (third edition, revised by Christian M.I.M. Matthiessen) London: Arnold.
- Halliday, M.A.K. and William S. Greaves. (forthcoming) *Intonation in the Grammar of English*. London: Equinox.
- Hirst, Daniel. and Albert Di Cristo. (eds.) (1998) *Intonation Systems: A Survey of Twenty Languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Johns-Lewis, Catherine. (ed.) (1986) *Intonation in Discourse*. London: Croom Helm.
- Kadooka, Ken-Ichi. (2000) "A Contrastive Study of Function in Intonation Systems. (Part 1)" in *Ryukoku Studies in English Language and Literature*. Vol. 19. pp. 33-44.
- Kadooka, Ken-Ichi. (2001a) "A Contrastive Study of Function in Intonation Systems. (Part 2)" in *Ryukoku Studies in English Language and Literature*. Vol. 20. pp. 20-33.
- Kadooka, Ken-Ichi. (2001b) "A Note on the Interpersonal-Nuance Carriers in Japanese." in *JASFL Occasional Papers*. Vol. 2. pp. 17-28.
- Kadooka, Ken-Ichi. (2002) "How Intonation Works in Tone Languages?" in *The Ryukoku Journal of Humanities and Sciences*. vol. 23. No. 2. pp. 13-27.
- Kadooka, Ken-Ichi. (2003) "A Systemic Analysis of Intonation System of English." in *The Ryukoku Journal of Humanities and Sciences*. vol. 24. No. 2. pp. 13-27.
- Kadooka, Ken-Ichi. (2004a) "On the Multi-Layer Structure of Metafunctions." in *JASFL Occasional Papers*. Vol. 3. pp. 43-62.
- Kadooka, Ken-Ichi. (2004b) "A Systemic Approach to the Typology of Functions in Intonation Systems." in *Festschrift for Professor Masayoshi Shibatani's Sixtieth Birthday*. Edited by Taro Kageyama and Hideki Kishimoto. Tokyo: Kurosio. pp. 389-404.
- Kadooka, Ken-Ichi. (2006) "A Systemic Account on Strata and the Meaning of Intonation." in *The Ryukoku Journal of Humanities and Sciences*. vol. 27. No. 2. pp. 43-58.
- 亀井孝、河野六郎、千野栄一 (編著) (1989) 『言語学大辞典 第2巻』東京：三省堂。
- O'Connor, J.D. and G.F. Arnold. (1973) *Intonation of Colloquial English* (second edition). Japanese translation by Katayama et al. Tokyo: Nan'un-do.
- Pike, Kenneth. L. (1945) *The Intonation of American English*. Westport, Conn.: Greenwood Press.
- Tench, Paul. (ed.) (1992) *Studies in Systemic Phonology*. London: Pinter.
- Tench, Paul. (1996) *The Intonation System of English*. London: Cassell.
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』東京：くろしお。
- Wennerstrom, Ann. (2001) *The Music of Everyday Speech*. Oxford: Oxford University Press.
- 山口登、寛壽雄 (2001) 『機能文法概説』東京：くろしお。